

令和6年度(第75回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	浅野 和之	<p>短編ながら「What If If Only—もしも もしせめて」での演技は激賞ものであった。若い頃から卓越していた身体能力の高さは今なお健在。そのキレのある身体を駆使しながら、主人公の「未来」と「現在」という難しい二つの役柄を軽やかに、かつ深遠に演じてみせた。また、「リア王」では両目を抉(えぐ)られるという悲惨な「グロスター伯爵」を、一転して抑制を利かせた身体で淡々と演じ、その中にどこまでも揺るがない忠義心と深い悲しみを色濃く滲(にじ)ませた。正に、名演技は身体を伴ってこそ人の心を打つ。その証左となる稀有(けう)な俳優であろう。</p>
演劇	坂東 彌十郎	<p>長身で押し出しが良く、敵役から老け役まで幅広く演じる。「髪結新三」の家主長兵衛では小悪党の新三を掌で転がすような強(したた)かな家主を巧(たく)みに描き出し、「義経千本桜(よしつねせんぼんざくら)」の「すし屋」では全てを飲み込んだ梶原景時(かじわらかげとき)の底知れなさを感ぜさせた。また「伊勢音頭恋寝刃(いせおんどこいのねたば)」のお鹿では、可笑(おか)しめと愛らしさに加えて哀愁を漂わせた。線の太い立役(たちやく)として、古典と新作で主役から脇役までますますの活躍が期待される。</p>
映画	石井 岳龍	<p>石井岳龍氏の映画「箱男」は、生誕100年を迎えた世界的作家の映像化困難と言われた代表作に基づいている。原作の持つアンチロマン的な企図を十分に活(い)かしつつも、紛れもなく石井映画としか言いようのない実験性と娯楽性が巧(たく)みにブレンドした、独自のアクション映像空間に昇華させた。半世紀近くにわたり、日本映画の枠を超えた奔放な想像力と映像表現で唯一無二の創作活動を続けてきたことも含め、円熟味を増した本作の成果を高く評価したい。</p>
映画	土井 敏邦	<p>NHKや民放で多くのドキュメンタリー番組を発表し、「沈黙を破る」「福島は語る」など秀(すぐ)れた記録映画を撮ってきた監督土井敏邦氏は、大震災時の原発事故で、大量の放射性物質が降り注ぎ、100年は帰還困難と言われた福島県東部・津島の人々の記憶と感情を長期にわたって誠実に取材し、全9章、3時間を超える圧巻の秀作「津島 福島は語る・第二章」に結実させた。災禍の時代の中で、日本と世界に通底する主題を見事に提示した、その功績に敬意を表したい。</p>
音楽	岡村 慎太郎	<p>令和6年の岡村慎太郎氏の活動には、助演においても主催公演においても飛躍があった。「根曳(ねびき)の松」では、地歌が持つ闊達(かつたつ)なエネルギーと三曲合奏の楽しさを生き生きと伝え、「早舟(はやふね)」では地歌の原点としての三味線組歌(くみうた)の魅力を示した。「残月」では、繊細な節回しを歌い込み、箏(そう)の音色を美しく響かせて、哀感にあふれる詞章の世界と快活にも感じられる音楽性をうまく調和させた。楽器の響きと作品の音楽性を深く追求し、共演者とのバランスも保つ氏の活動の奥行きと幅の広さが高く評価された。</p>
音楽	阪 哲朗	<p>ドイツのオペラ劇場で長く活躍してきた阪哲朗氏は、びわ湖ホール芸術監督として初めてのプロデュースオペラ公演であるリヒャルト・シュトラウス「ばらの騎士」で、オーケストラを室内楽のように響かせ、台本のすみずみまで明快に聴かせることで、作品を「ドラマ」として響かせた。この手腕は山形交響楽団とのヴェルディ「椿姫(つばきひめ)」でも聴衆を魅了し、京都市交響楽団の定期演奏会(ブラームスとドヴォルザーク)では、オーケストラを東欧的な陰影で染め上げ、奔放なリズムでエキサイティングな演奏を聴かせた。</p>
舞踊	尾上 紫	<p>上演の2曲ともに、確かな技術に裏打ちされた「抑制された型の中からの内面描写」に優れ、日本舞踊の魅力を十分に見せた。流儀に伝わる振付の清元(きよもと)「熊野(ゆや)」では、平宗盛(たいらのむねもり)と熊野のそれぞれの複雑な胸中と美しい春の情景とを品格ある所作で紡ぎ、作品の情緒を堪能させた。長唄「娘道成寺(むすめどうじょうじ)」は、この曲の表現として大切な段ごとの変化と娘の思いを、緩急自在ながらも要所を押さえた動きの中に醸し出し、洗練された舞台に仕上げた。今後も日本舞踊の深みを示す、更なる活躍が期待される。</p>

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	柄本 弾	柄本弾氏は平成20年東京バレエ団入団、同22年「ラ・シルフィード」「ザ・カブキ」で主役に抜擢され成功を収めた後、古典バレエから現代バレエまで多くの作品で主役を務め成果を上げた。60周年を迎えたバレエ団における氏の実績は高く評価できる。令和6年は特にクランコ版「ロミオとジュリエット」ロミオ役、ベジヤール振付「ザ・カブキ」由良之助(ゆらのすけ)役で、ドラマチックな演技力とキレのあるテクニックで説得力ある作品に仕上げていることは大いに評価される。
文学	野木 京子	日常の認識や感覚に生じる亀裂を直視し、不安や哀(かな)しみ、違和感や喪失感と向き合う言葉を探究する。野木京子氏の「廃屋の月」はそうした営為から生まれた詩集だと言える。詩を書く意味を「知らない廃庭か廃屋に入っていくこと」と重ねる視点は、人間と言葉との関係を真摯に見詰める心の在り方を映す。水母(くらげ)や樹木や死者に目を向け、耳を傾け、世界の奥行きを暗示する。詩の深さと歎(よろこ)びを示す豊かな実りであり、受賞にふさわしい。
文学	町屋 良平	「私の小説」は五つの作品(「私の文体」「私の労働」「私の推敲(すいこう)」「私の批評」「私の大江(おおえ)」)からなる短編集。タイトルが示すように、書くべき対象としての「私」に過剰に拘泥(こうでい)しながらも、架空作家からの「引用」や、妄想とユーモアをたっぷりまぶした作品は、書く主体としての「私」を批評する冴(さ)えた目に貫かれている。優れて自己言及的なフィクション(異形の「私小説」)によって、日本文学の「伝統」を刷新した功績は大きい。
美術A	石田 尚志	身体的な行為の痕跡としてのドローイングで知られる石田尚志氏は、個展「絵と窓の間」において、絵具の層として重ねられていく絵画が、時間の層を内包する存在である意味を、制作過程の映像とキャンバスや壁画で構成するインスタレーションを通し提示した。また葉山の海に面した光差し込む展示室で会期中手掛けた壁画制作は、窓外の水平線の延長上に展開し、自然空間の時の流れと呼応する絵画への新たな取組ともなった。絵画と映像、物質とイメージ、空間と光の関係をめぐる40年に及ぶ考察と実践を、展示空間において鮮やかに示した意義は高く評価されるものである。
美術A	塩田 千春	大阪中之島美術館で開催された個展「塩田千春 つながる私(アイ)」は、これまで氏が追求してきた「生きること」「存在の意味」というテーマに加え、パンデミックの時代を経て、人が生きる上で不可避の社会的な関係性という視点からアプローチした新作が出品されるなど、作家としての充実度の高さを示す内容だった。また中国、トルコ、チェコでの個展も開催され、生と死という根源的な問いを鮮やかにダイナミックなインスタレーションとして昇華させる氏の作品は、洋の東西を問わない普遍的テーマを探求する奥行きの高さゆえに、国際的にも広く認知されている。
美術B	開発 好明	開発好明氏は1990年代から、美術という枠を超え、社会の中で何かを起こす多種多様な作家活動を街中やアートフェスティバル、被災地等で行ってきた。展示可能な作品という形で残る表現が少なく、30年以上のキャリアの全貌の把握は困難だったが、個展「ART IS LIVE ―ひとり民主主義へようこそ」において、過去記録に加え、現在進行形の作家活動を展開、鑑賞者が自(おの)ずと参加者へ、さらに行方者となっていく構造を創出した。ほぼ毎日、何かが生じる展示への能動的参加を通して、作家が継続して行ってきたこと―一人一人の存在が社会を動かし、変え得る原動力となるという気付きをもたらした。
美術B	金築 浩史	90年代から展覧会エンジニアとして、作品の設営、技術サポート、メンテナンスなどを通じて多くのアーティストやキュレーターと協働し、展覧会の成功に貢献してきた。アーティストのビジョンを実現するため、最適な機材の選定や設置方法を提案することで、作品の魅力を最大限に引き出す役割を果たし、金築浩史氏が手掛けた展示は「カネチック・アート」と呼ばれるほど、この分野で高い信頼を得ている。近年は、若手アーティストや技術者の育成にも力を注いでいる。

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	青山 剛昌	「名探偵コナン」は今や国民的作品である。アイデアの質と量を問われる推理ものでありながら、多彩なキャラクターの魅力も加わり、高い人気を保ち続け、令和6年には連載30周年を迎えた。青山剛昌氏は平成8年からスタートしたアニメ、特に平成9年から公開が始まった劇場版にも深くコミット。劇場版も令和5年、令和6年には連続して興行収入100億円を超える大ヒットを記録した。長期にわたって良質のエンターテインメントを創出したその業績を讃(たた)えたい。
メディア芸術	桜井 政博	これまで桜井政博氏が培ってきたゲーム制作の知見を広く共有し、ゲーム業界の発展に大きく寄与したことが理由である。YouTubeを通じて、分かりやすく、一貫したストーリー性を持った親しみやすい形で公開したことで、ゲーム制作に関心のある若者だけでなく、幅広い層へと伝わっていった。また、英語版も公開されており、国内にとどまらず、海外でもその影響が波及しており、今回、芸術選奨を受賞するに当たって十分な功績を残したと考える。
放送	阿部 サダヲ	極端にデフォルメされた昭和時代をコミカルかつ自然に演じ切っている。時にクスツと笑える演技も交え、令和の人々を説得するかのように話を詰めていく演技には目を見張るものがある。また、このドラマ特有の毎回終盤に訪れるミュージカル仕立てのシーンも、役柄のイメージを崩すことなく踊り切っている。その後、現実のシーンに戻った際にも、不自然さがなくストーリーに戻す演技力は圧巻である。台詞(せりふ)回しやイメージ作りが難しいオリジナル脚本を、見事なまでに演じている。
放送	村瀬 史憲	村瀬史憲氏を中心とする取材チームは、1本の番組を発火点として取材を継続し、枝分かれさせ、さらに何本もの作品に結実させていく。例えば「防衛フェリー～民間船と戦争～」(平成29年)や「面会報告～入管と人権～」(令和2年)では、これらの作品を皮切りとして同じテーマの秀作を次々に放送し続けた。「掌で空は隠せない～1926木本事件～」はおおよそ100年前に発生した朝鮮人労働者の虐殺事件を検証した作品。事件を振り返ると同時に、現代での和解への希望を描いた。この作品を発火点に村瀬組は次にどんな果実を実らせるのか。
大衆芸能	立川 談春	芸歴40周年記念興行「立川談春独演会」、ネタ出し40席、一席目は前座噺(ぜんざばなし)や“随談(ずいだん)”という構成で、東西で開催された。登場人物の心情を、時に台詞(せりふ)の中で、時に地に戻って掘り下げ、観客の感性に問う。美しい言葉選び、落語という形式で己の芸を作った。しかし師匠立川談志(たてかわだんし)が垣間見(かいまみ)えて、やはり落語であると主張をしているかのようだ。この数年の孤高ではない活動が、かえって己の一席を磨いた。牽引力(けんいんりょく)としてのこれからを期待する。
大衆芸能	柳家 喬太郎	古典か新作か、人情噺(にんじょうばなし)か滑稽噺(こっけいばなし)か、と分けたがる落語だが、柳家喬太郎氏の落語はそれぞれの良さを活(い)かしたまま現代的思考で掘り下げ、見事な構成力で「壁」を壊しつつ、エンターテインメント性豊かな作品に昇華させる。上野・鈴木演芸場での企画公演は、言わば藤山寛美(ふじやまかんび)が挑んだ「リクエスト公演」の落語版。だが、ただの人気ネタの再演ではなく、今を生きる世代に伝わるよう工夫を凝らし、圧倒的な引き出しの多さと懐の深さを見せつけた。
芸術振興	広上 淳一	オーケストラ・アンサンブル金沢のアーティストック・リーダー・広上淳一氏は、避難所、病院、小学校、交流施設、道の駅など、被災者の日常に音楽を届ける活動を被災後直ちに展開。こうした訪問コンサートを今後も「5年、10年のスパンで続ける」としている。本活動では、地域に根ざして育まれてきた文化が、実質的に芸術家と市民が双方向で支え合う円環を形成しており、共生社会における今後の芸術文化活動の展開に多くの示唆を与えるものとなっている。

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	丸岡 ひろみ	横浜国際舞台芸術ミーティング(YPAM)のディレクターとして、国内外のアーティストやプロデューサー、観客が出会う公演やミーティングを通じて舞台芸術の国際交流の発展と日本の舞台芸術を国内外に発信するプラットフォームの確立に尽力してきた。パンデミック期を柔軟な戦略により乗り越え、令和6年は、アジア/オセアニア、欧州地域の国際フェスティバルの現在と未来をテーマとしたシンポジウムの開催や、全体プログラムの強化、国内外からの参加者の増進、地域における舞台芸術環境の向上に取り組み、日本における舞台芸術の更なる発展とプレゼンスの向上に寄与した。
評論	有木 宏二	西洋近代文明から逃れ、南洋の仏領ポリネシアで見出(みいだ)した野生の美を絵画に具現したポール・ゴーガン。「ゴーガンと仏教」はそんなイメージを見事に崩壊させる。仏訳された仏教教典を通じてブッダの教えに導かれた画家が、資本主義の欲望と人間の業に抗(あらが)い、「解脱」を求めて苦闘し続けた痕跡を鮮やかに読み解いていく。アジア発の新しいゴーガン像を誕生させた著者の力業を高く評価したい。正に現在が待ち望む問題提起の書である。
評論	片山 杜秀	「大楽必易—わたくしの伊福部昭伝—」は、作曲家伊福部昭との長年にわたる交流を基に、氏の言葉を再現しながらその生涯の軌跡を辿(たど)るものである。人生の細部に分け入って本心に迫ったかと思えば、その細部を日本と世界の社会情勢から俯瞰(ふかん)し意味付けていく。氏の音楽の音階やリズムをも蘇(よみがえ)らせる文章からは、映画「ゴジラ」の音楽だけではない、世界の中に位置付けられる伊福部作品の世界が明瞭に見えてくる。「西洋」や「中央」におもねらず、北海道での原体験を基に作曲に邁進(まいしん)したという氏の足跡を語る本書は、近代の価値観をも再考させる示唆に富む一書となっている。

令和6年度(第75回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	江口 のりこ	「ワタシたちはモノガタリ」では、小説家になる夢を抱いてWebライターを続けてきた40歳の独身女性を等身大の演技で見せ、一貫して関西弁を使用した。キレの良い、時に素っ気なく響く発話が笑いを誘ったが、そこには深い情感、繊細な心の揺れが確かに滲(にじ)んでいた。一方、シェイクスピア劇「リア王」では父親を裏切る長女ゴネリルを印象的に表現した。働く女性でも王女でも、それぞれに存在感を示す稀有(けう)な俳優である。多彩な役柄での一層の活躍が期待される。
演劇	藤田 俊太郎	ストレートプレイとミュージカル、いずれにおいても一歩踏み込んだクリアな解釈を行い、骨太なメッセージをエンターテインメントに昇華させている。初めてのシェイクスピア作品「リア王の悲劇」においても、使用する戯曲のバージョン選択から周到な準備に努め、根拠を示した上で、現代の価値観とコンプライアンスに依拠した明快なアップデート版を提示してみせた。「新人」の呼称にふさわしいのは年齢のみの、現代演劇界のトップランナーである。
映画	河合 優実	24歳の若さで、既にスケールの大きさと表現の繊細さを兼ね備えた俳優が現れた。主演の2本「あんのこと」「ナミビアの砂漠」では、必ずしも観客の共感を得るタイプの人物ではないにもかかわらず、いとおしさを感じる魅力的な造形をしてみせた。氏以外の俳優が演じたら、全く異なる印象の作品になっていただろう。役柄が難しければ難しいほど力を発揮する氏は、作品のクオリティを上げることのできる俳優である。
映画	三宅 唱	三宅唱氏は、現代日本を代表する新たな世代の映画監督の一人として、既に着実に地歩を築いてきた。「夜明けのすべて」は、原作小説の世界を丁寧に活(い)かしながら、初期作以来、若者たちの群像劇をみずみずしく描き出してきた氏の作品世界の一つの到達点を示した。撮影に用いた16ミリフィルムも豊かな映画世界と合致して素晴(すば)らしい効果を上げている。令和6年の日本映画の最良の成果である本作からは、今後の氏の更なる飛躍が存分に窺(うかが)える。
音楽	北村 朋幹	磨き抜かれた水晶を思わす響きで、どんな細部をも漫然と弾き飛ばさず、確たる解釈を聴かせる北村朋幹氏。そのピアノズムが、リスト作曲「巡礼の年」全曲を取めたディスクにおいて、一つの頂点に達した。グリーグ、ノーノほかの作品を併録するセンス、並びにそれら楽曲とリストとの関連について述べた自身による解説文も非凡というほかない。旺盛な公演活動では、フォルテピアノ演奏でも秀でていることをこの令和6年に初めて披露した。美的にも知的にも余人を圧倒する音楽家の出現を、言祝(ことほ)ぎたい。
音楽	長谷川 将山	「都山流におけるヴィルトゥオジティー(名技性)」と「尺八の器楽的可能性」の二つを軸とする二部構成の演奏会は、企画力の高さとともに、新進気鋭の若手尺八家としての希有(けう)な実力を鮮烈に印象づける内容であった。尺八の“現在”に果敢に挑戦し、超絶技巧と高い表現力を駆使した長谷川将山氏の演奏には、想像を超える尺八の可能性が広がっていた。同時に、虚無僧(こむそう)の法器という歴史が培ってきた尺八の精神性と尺八本来の深淵(しんえん)な音色も輝いていた。将来の活躍を大いに期待できる新人として評価できる。
舞踊	スズキ 拓朗	主宰するダンス・カンパニーCHAiROIPLINで深い文学性に裏打ちされた新作をコンスタントに発表するほか、テレビ、ミュージカル等でも活躍し、現在最も注目される若手振付家の一人である。令和6年は、「おどる落語「らくだ」」「おどる絵本「じごくのそうべえ」」、連続して取り組んでいるシェイクスピア戯曲から「おどるシェイクスピア「PLAY!!!!!!～夏の夜の夢～」」ほかを上演。稚気に富むと同時に繊細、また驚くべき独創性と同時代性やユーモアをもって古典を再解釈し、大きな成果を挙げるとともに今後の更なる飛躍を期待させた。

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	中村 鷹之資	中村鷹之資氏は、25歳という若さであるが自身の勉強会を既に9回重ねている。今回は「二人三番叟」(ふたりさんぼそう)の三番叟を狂言の野村裕基(のむらゆうき)氏と共演ではつらつとした好演を見せ、歌舞伎舞踊狂言取り物の傑作「棒しばり」では次郎冠者(じろうかじゃ)を演じ圧倒的な評価を得た。文部科学大臣新人賞にふさわしい清新な舞台は、爽やかな印象を観客に与え、舞踊界にも大きな刺激となったことだろう。
文学	井戸川 射子	井戸川射子氏の「無形」は、海に面する団地を舞台にして、立ち退(の)きを迫られている老若男女(ろうにやくなんによ)の住民たちの姿を描いた作品だが、独特の句読点の打ち方、切れ目を感じさせない焦点人物の切り替えといった新しい手法によって、変わらないものと変わるもの、形のあるものと形のないものを言葉で表現することに成功している。言語芸術としての小説にしか表現できないものを絶えず追求しようとする姿勢は高く評価でき、今後の更なる可能性も期待させる点で、文部科学大臣新人賞にふさわしい。
文学	西村 麒麟	西村麒麟氏の句集「鷗」は生き物の句が、まず魅力的である。「やどかりの小さき顔が脚の中」「後列の頑張つてゐる燕(つばめ)の子」「放屁虫(へひりむし)後ろの足をひよいと上げ」。よく観察して、その生き物をいきいきと捉え得ている。その生の可憐(かれん)さまでを感じさせている。「インバネス死後も時々浅草へ」といった不思議が表れている句も貴重である。図太い心と細やかな表現力で、俳句に新しい世界をもたらす可能性をもった作者だ。
美術A	青山 悟	資本主義、労働価値、暴動、ジェンダー問題…青山悟氏はこのような現実的で過酷な課題の歴史を精査し、そこから炙(あぶ)り出される違和感と疑義を作品化することで現代を明快に問う作家である。過去と現在を繋(つな)げ、見る者を思考させる力とユーモアを持っている。令和6年春の「青山悟 刺繍少年フォーエバー」展は氏の実力を見せる良い機会となった。氏は絵画や彫刻という分野には収まらない刺繍表現を目覚めさせた。この稀有(けう)で知的な手作業を、現代の芸術まで昇華させた功績が高い評価に繋がった。
美術A	笹井 史恵	布や和紙貼りした土台となる形状に漆を塗り磨き上げる乾漆の技法により、生命感溢(あふ)れる造形を生み出す。数年来手掛ける色漆は笹井史恵氏自身の調合によるものだが、単色から多色へと色重ねを試みることで造形を形から一変させた。一見ポップに見えるその配色と捉えどころのないフォルムは、日本の色と自然や歴史的景観の中から抽出されたものであり、いずれの作からも日本に根付いてきた伝統と風土が香る。戦後、美術の土壌で彫刻的であることを求められてきた日本の工芸に、これら作品群は改めて現代の工芸としてあるべき必然性を示してくれる。
美術B	金仁淑	金仁淑氏はこれまで歴史や伝統における共同体、個の関係性、アイデンティティー等を主題に、作品を多数制作してきたが、令和6年は取材・制作を継続してきた題材を一層数多く、連続して展示した年となる。とりわけブラジルルーツの児童受入れを行う私立保育・教育施設で出会った子供を丁寧に取材した「Eye to Eye」では、被写体をほぼ原寸大で投影するモニターを点在させ、その間を鑑賞者が巡り歩く空間を作り出し、個と個の出会いや関係を再考させた。今後も歴史認識や社会的背景の枠組みを超えて、私たちが目の前の事象や個人と真摯に向き合うきっかけとなるような作品を期待している。
美術B	Nerhol (田中 義久) (飯田 竜太)	グラフィックデザインを基軸とする田中義久氏と彫刻家の飯田竜太氏という、専門領域の枠を超えた両氏の対話を起点とする表現活動を展開しているNerhol。連続イメージを積層し、手で「彫る」ことで時間と空間の多層性を探る代表作をはじめ、自然環境と人間社会、静止と移動、可視性と不可視性など様々な境界を行き来するようにして複雑に絡み合っている事象を掘り起こし、切り開いている。大規模個展「Nerhol 水平線を捲る」は17年間の活動の変遷やその深化を示しただけでなく、理解できないことを覆うものを捲り上げて新たな地平を探ろうとする彼らの更なる活躍を大いに期待させる力に満ちていた。

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	押山 清高	「鋼の錬金術師 嘆きの丘の聖なる星」でアニメーションディレクターとして大きな働きを見せた押山清高氏は、その後、演出にも仕事を広げ、「ルックバック」は監督第2作に当たる。原作を丁寧に読解(どっかい)した演出に加え、本作の原画の大半を一人で描くことで、「描く人」を主題とする原作の精神を見事に画面に定着させた。中でも主人公・藤野が雨中をスキップするシーンは、アニメ史上に残る名シーンである。今後の躍進を期待したい。
メディア芸術	橋野 桂	現代を舞台にしたRPG「真・女神転生」をリブランディングした「ペルソナ」シリーズ3作目以降のプロデュース、ディレクションを歴任。スタイリッシュなルック、軽快なテンポでグローバルに若い世代の支持を集める。授賞対象となった「メタファー：リファンタジオ」では満を持して王道ファンタジーの完全新作に挑み、瞬く間に全世界で100万本を突破。漫画、アニメのナラティブを進化させたJRPG。間違いなく現代のJRPGの旗手である。
放送	上田 大輔	弁護士資格を持ち、関西テレビの法務部勤務から、報道局へ異動。その後、「引き裂かれる家族～検証・揺さぶられっ子症候群」、「逆転裁判官の真意」などでテーマ性、クオリティーともに高い作品を作り上げ、ベネチアテレビ賞などで入賞を果たしている。令和6年の「さまよう信念 情報源は見殺しにされた」でも、時代から忘れられそうな事実に、弁護士であるディレクターならではの視点で切り込み、独自の作品に仕上げている。今後も様々な題材に挑んでほしいディレクターである。
放送	大島 隆之	「一億特攻」への道～隊員4000人 生と死の記録～は15年にわたりこのテーマを取材してきた大島隆之氏の到達点を示す番組である。探し出せる限りの元搭乗員の証言を記録し、全国400か所の遺族を訪ね歩いた。地を這(は)うような取材から「特攻熱」とも言うべき国を挙げての熱狂が見えてくる。人々が特攻に「希望」を見出し、メディアが増幅し、現実とかけ離れた妄想が社会を支配していく。その不気味なメカニズムは現代にも重なる。今後、特攻を論じる際に必ず参照されるべき作品である。
大衆芸能	坂本 頼光	寄席定席公演に映像投影を持ち込んだ努力により「活動写真弁士」が身近になり、存在感が再認識された。寄席演芸に一つのジャンルを増やしたばかりでなく、無声映画説明の随所に笑いをちりばめる。自作アニメ、古い映画の名場面に声色を駆使するオリジナリティー。ナレーションでも情報伝達に弁士の個性と知見を加える。素材を買い集めて次世代へ繋(つな)ごうという熱意からの努力が、語り手としての可能性を拓(ひろ)げる結果となった。元の芸の枠を超える次への展開を期待する。
大衆芸能	渡邊 琢磨	海外でも評価の高い渡邊琢磨氏は、多くの映像作品に音楽を提供してきた。令和6年カンヌ国際映画祭で国際映画批評家連盟賞を受賞し話題になった映画監督山中瑠子氏の「ナミビアの砂漠」、日本を代表する映画監督黒沢清氏の「Chime」「Cloud クラウド」と話題作3作の音楽を担当。クラシカルなオーケストレーションや電子音、ノイズなどの音響系、アンビエントなサウンド・デザインなど様々な手法をイマーシブに駆使する偉才である。既にイギリスを中心に世界でも注目を集める才能だが、彼の手掛ける映像のための作品や音楽作品は今後もその独自の世界観を発展させていこう。
芸術振興	小川 希	平成20年、東京・吉祥寺に実験的な芸術表現を追求する芸術複合施設「Art Center Ongoing(アートセンター・オンゴーイング)」を開設。国際的なネットワークを活(い)かした滞在制作プログラムや、芸術祭への企画参加など幅広く活動。令和6年には「芸術激流2024ラフティング+アート」で、御岳渓谷(みたけけいこく)を会場に、急流を下る観客に現代美術家や詩人らが作品発表を行い、従来の展示会の枠組みを超えて、表現者と鑑賞者の協力関係の中で成立する作品鑑賞における合意形成の在り方を拡張する活動を展開した。

令和6年度(第75回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	松田 崇弥 松田 文登	松田崇弥氏と松田文登氏は、主に知的障害のある作家が手掛けたアートの、社会の中での流通を図るために、平成30年に株式会社ヘラルボニーを起業した。令和6年には「HERALBONY ART PRIZE」を創設したほか、パリにヨーロッパ支社を設立して海外活動の拠点とするという特筆すべき実績があった。著作権管理やライセンス料の適切な設定によって、障害のある作家が自立する道を開くという一見困難な挑戦を積極的にしている点において、高く評価したい。
評論	高橋 義彦	「ウィーン1938年最後の日々―オーストリア併合と芸術都市の抵抗」は、アドルフ・ヒトラーの侵略により、オーストリアが併合され、国家が消滅した事件とその後を描く。当時の首相シュシュニクを軸に、文化人の群像が鮮やかに浮かぶ。爛熟(らんじゅく)した文化が、あっけなく崩壊していくさまを活写する。ヨーロッパの現在を考える上でも貴重な示唆に満ちている。巧(たく)みな構成、飾らない文章、物語る力。批評文芸の優れた達成である。
評論	林 淳	日本の近現代書道史は20世紀半ばに脚光を浴びた前衛書の活動を中心に語られてきた。「いびつな「書之美」 日本の書がたどった二つの近代化」は、こうした「革新派」の影に隠れた「伝統派」にも光を当て、従前のいびつな構造を浮かび上がらせる。双方の制作理念を対比しながら、両派の美学を総合的に俯瞰(ふかん)することで新たな歴史認識を打ち出したのは大きな功績である。しかも、書に関する著者独自の評価軸を示すなど、意欲的な姿勢を見せている。文部科学大臣新人賞にふさわしい力作と言えよう。